

# 令和7年産大崎地域の 大豆作技術情報(第4号)

令和7年8月8日発行  
宮城県大崎農業改良普及センター  
TEL: 0229-91-0726 FAX: 0229-23-0910  
<https://www.pref.miyagi.jp/site/osnokai/>

## ～栽培のポイント～

- ・天気予報に注意し、湿害・干害を防ぐほ場管理を行いましょう。
- ・大豆の生育ステージを確認し、病害虫防除を適期に行いましょう。

## 1 気象経過

- ・気温は、6月第3半旬及び7月第3半旬を除き、平年よりも高く推移しました。
- ・6月第4半旬から8月第1半旬までまとまった降雨が無く、極めて少雨となりました。
- ・今後も向こう1か月間程度は気温が高い状態が続くことが予想されます。

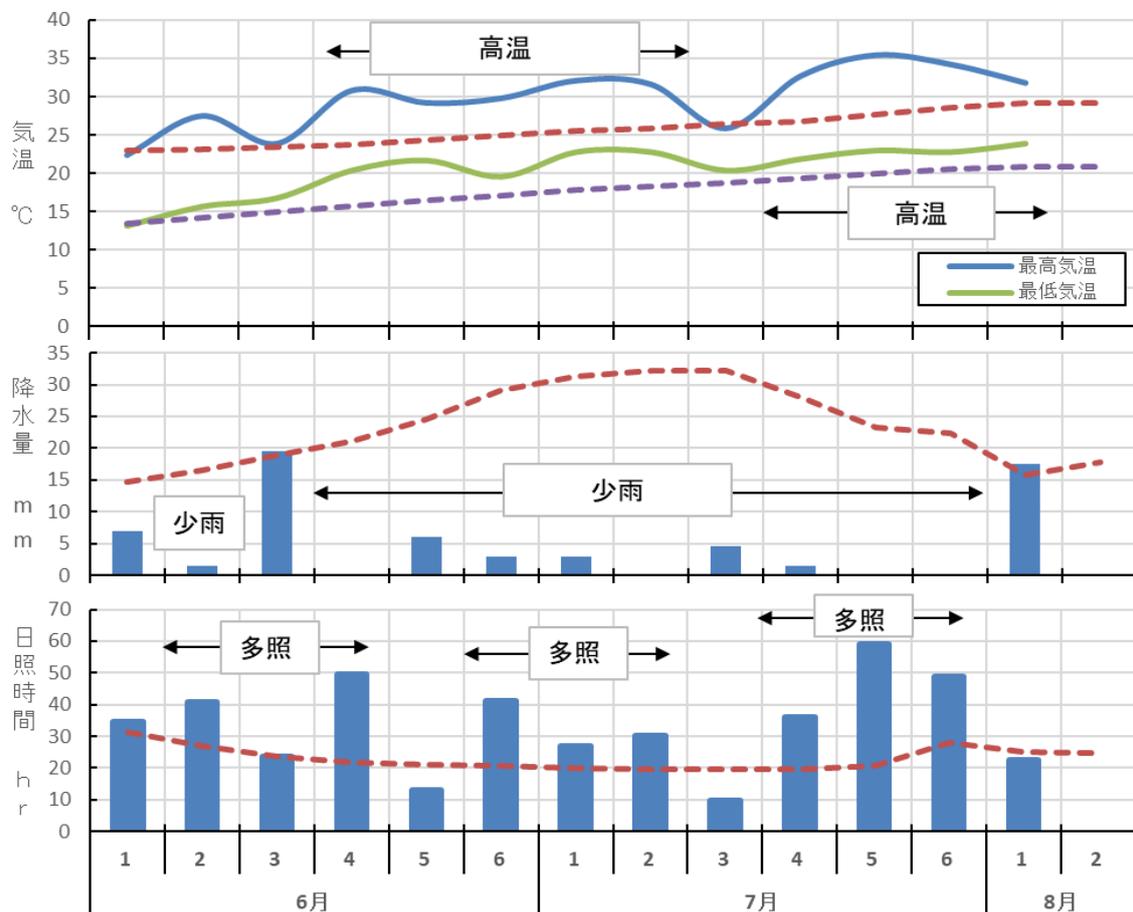


図1 6月第1半旬～8月第2半旬までの気象(古川アメダス)

※1 実線又は棒グラフが本年値、点線は平年値

東北太平洋側 1 か月予報 (8月9日から9月8日)				8月7日仙台管区气象台発表			
<向こう1か月の確率(%)>				<気温経過の確率(%)>			
	低(少)	平年並	高(多)		低い	平年並	高い
【気温】	10	10	80	1 週目	10	20	70
【降水量】	50	30	20	2 週目	10	10	80
【日照時間】	10	30	60	3～4週目	10	20	70

## 2 生育概況(8月8日現在)

- ・5月28日播種の「古川タンレイ」は、平年より3日早い開花期となり、主茎長・主茎節数は平年・前年を下回るのに対して、分枝数は平年・前年を上回りました。
- ・6月6日播種の「古川ミヤギシロメ」は、平年より2日早い開花期となり、生育は平年を上回りましたが、分枝数は前年より少なくなりました。
- ・5月30日播種の「古川きぬさやか」は、平年より2日早い開花期となり、主茎長・主茎節数は前年を下回るのに対して、分枝数は前年を上回りました。
- ・6月12日播種の「小野田すずみのり」は平年より2日早い開花期となり、主茎長・主茎節数は前年を下回りましたが、分枝数は上回っています。
- ・多くのほ場で生育が前年を下回っている要因としては、6月中旬から7月下旬にかけての高温・少雨が影響していると考えられます。
- ・管内では、乾燥による葉の黄化症状が見られるほ場もあります。

表1 生育調査結果

※1 平年比は、前5カ年(令和2年～令和6年)の平均値との比較

地区名 品種名	区分	播種日	開花期	8月8日		
				主茎長 (cm)	主茎節数 (節/本)	分枝数 (本/本)
古川 タンレイ	本年	5月28日	7月22日	46.1	12.5	3.6
	前年比	1日遅い	±0日	57%	79%	120%
	平年比	1日遅い	3日早い	69%	84%	114%
古川 ミヤギシロメ	本年	6月6日	8月2日	95.1	17.4	3.9
	前年比	1日早い	±0日	113%	106%	90%
	平年比	2日早い	2日早い	116%	109%	103%
古川 きぬさやか	本年	5月30日	7月27日	43.2	10.2	4.0
	前年比	2日遅い	2日早い	56%	72%	119%
小野田 すずみのり	本年	6月12日	7月28日	44.5	9.2	3.3
	前年比	4日遅い	2日早い	66%	67%	124%

## 3 今後の栽培管理のポイント

### (1) 湿害・干害対策

#### ▶湿害対策 —降雨が続く場合—

子実が肥大する生育後期の土壌過湿は、根の呼吸阻害だけではなく、根粒菌の活性低下による窒素供給の抑制を引き起こし、減収につながります。

○降雨の前後に排水溝や明きよを点検し、排水が滞らないようにしましょう。

○水が溜まったところは溝を切り、明きよに繋げ、排水を促しましょう。

#### ▶干害対策 —晴天が10日以上続くような場合—

開花期以降は、大豆の養水分吸収が多くなる時期であり、土壌水分が不足すると落莢・不稔莢の増加、百粒重の低下を引き起こし、減収につながります。

○かん水が可能な場合は、排水溝や畦間内に土壌表面にしみ出す程度まで通水し、ほ場に水分を補給しましょう。

○暗きよの水甲を閉じ、土壌の水分保持に努めましょう。

## (2) 病虫害防除

### ▶紫斑病 —開花期後 20～40 日に 1～2 回防除—

- 「タンレイ」は紫斑病抵抗性が“やや弱”であり、連作ほ場や成熟期に降雨が多い場合は多発するので、2 回防除を徹底しましょう。
- 同一系統薬剤を多数回散布すると耐性菌が発生する恐れがあるので、2 回防除の場合は異なる系統の薬剤を使用しましょう。
- 収穫が遅くなると発生を助長するので、適期収穫に努め、できるだけ早く乾燥させましょう。



写真1 紫斑粒

### ▶マメシクイガ

- 8 月下旬に 1 回目、その 7～10 日後に 2 回目の防除—
- 羽化した成虫やふ化直後の幼虫に対する防除が効果的です。
- 大豆を連作すると、越冬幼虫が増加し、食害の発生が多くなるので、連作ほ場の発生状況に注意しましょう。



写真2 マメシクイガ幼虫

### ▶フタスジヒメハムシ —8 月下旬～9 月上旬に防除—

- 8 月下旬頃までの若莢を食害することで、そこからカビが入り込み、汚粒（黒斑粒）や腐敗粒となります。作付け初年目から被害が出やすい傾向にあります。



写真3 フタスジヒメハムシ成虫

### ▶ジャガイモヒゲナガアブラムシ —8 月～9 月に防除—

- 8 月下旬～9 月上旬に急激に発生すると、吸汁害に伴う早期落葉により、収量・品質に大きな被害が出ます。
- 種子塗布処理をしていない場合は、生育後半の発生密度が高くなることもあるので、注意してください。



写真4 ジャガイモヒゲナガアブラムシ成虫

### ▶吸実性カメムシ類カメムシ類 —他の主要害虫との同時防除—

- 莢が着き始める頃から莢が黄熟する頃までの莢内の子実を吸汁加害します。越冬地（雑草地、山林等）付近では発生が多くなるので注意しましょう。



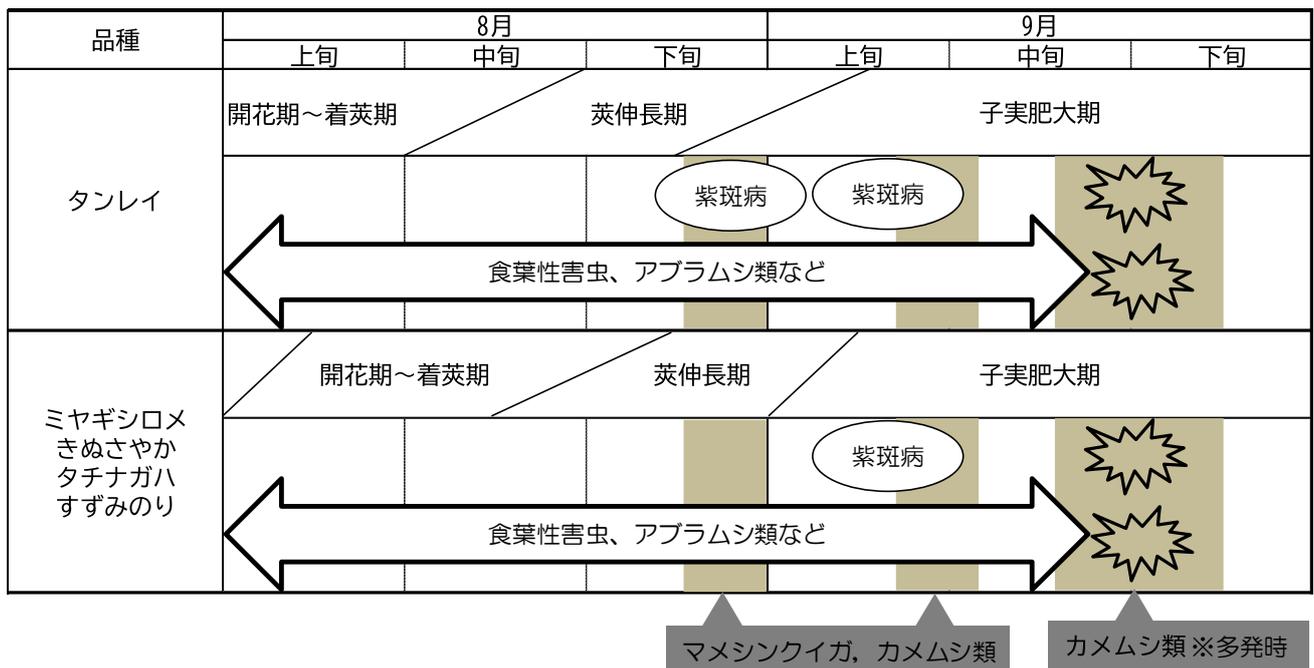
写真5 大豆を食害する主要なカメムシ 3

○防除は着莢期から子実肥大中期を重点に、他の主要害虫と同時に 2 回以上実施するようにしましょう。

なお、散布後もほ場に「吸実性カメムシ類」が確認される場合は、追加防除を検討しましょう。

※病害虫防除所 8 月 7 日発行の「発生予報第 7 号－大豆－」では、7 月 23～25 日、28 日の巡回調査における「吸実性カメムシ類」の地点あたり寄生頭数は平年よりかなり多く、かつ、過去 10 年間で最も多かったことに加え、高温が発生に好適であること、向こう 1 か月の平均気温が平年よりも高いと予報されていることから、8 月下旬までの発生量は「多」と予想されています。

図 2 病害虫防除体系例



◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆農薬危害防止運動（6月1日～8月31日）◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

6 月から 8 月にかけて、農作物等の病害虫が発生しやすく、農薬を使用する機会が最も多くなる時期です。農薬安全対策の不備や不注意等による事故が発生しやすくなるため、農薬使用による危害防止と環境に配慮した適正な農薬の使用を徹底しましょう。

運動のテーマ 「守ろう 農薬ラベル、確かめよう 周囲の状況」

「大崎地域の稲作技術情報」、「大崎地域の大豆作技術情報」、「大崎地域の麦作技術情報」は、当普及センターのホームページでもご覧いただけます。インターネットで「大崎農業改良普及センター」と検索または右の QR コードを読み取ってください。

